

持続可能な森のようちえんの開園を目指して

—HANAの森を舞台にした1年間の実践記録—

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 山本 佳穂

1. 研究背景

私は、母が運営する森のようちえんに触れながら、幼少期を過ごした。高校生になってからはスタッフとして関わりはじめ、自然の中で過ごす時間や、子どもと大人が対等な関係で関わる場の心地よさを体感してきた。そして、いつか私も森のようちえんを始めたいという夢を持つようになり、アカデミーに入学した。

在学中は、さまざまな森のようちえんや保育現場に視察に行った。森のようちえんの魅力を再発見すると同時に、運営面での課題が沢山あることにも気付いた。

そんな中、地元愛媛で民泊を運営するパートナーが、新しく古民家を手に入れた。敷地内の広々とした畑や山林を見た瞬間、ここで森のようちえんを始めようと決意した。せっかくゼロから始めるなら、なんとなく始めるのではなく、見えている課題を解決してスタートしたい。しかし、参考となる森のようちえんの運営に関する記録や研究はほぼ見当たらなかった。それならば私が、課題を意識して開園準備を進め、そのプロセスを記録することで、今後他の人の参考になればと考えた。

2. 研究の目的

森のようちえんが抱える課題を意識しながら、持続可能な運営を目指して自らの園の設立準備を進めるとともに、そのプロセスを記録に残すことを研究の目的とした。

3. 基礎調査

▼3-1. 調査方法

現場の状況や課題を把握するために、岐阜県内外の保育施設や森のようちえんで現場視察、インタビュー、インターンシップを行った。調査では、多くの園が共通して抱える様々な課題が見つかった。またそれらの課題が大きく4つに分類できることにも気付いた。

▼3-2 調査結果から見えた4つの課題

〈1つ目：地域との関わり〉地域への挨拶も無しに活動を始めたことでトラブルになった事例や、関係性のもつれから、活動ができなくなった事例もあった。どれだけ良い活動でも、地域住民の理解なしに続けることは不可能だ。

〈2つ目：自然との関わり〉自分たちのフィールドの基本的な自然情報や持続可能な管理への関心は低いことが分かった。自然への理解不足は自らのフィールド

にダメージを与え将来利用できなくなる可能性もある。その土地が持つポテンシャルやリスクに気づき、持続可能な管理ができれば、保育の質が高まるはずだ。

〈3つ目：他業種との関わり〉多くの現場保育士たちが、ごく限られた狭い社会の中にいることが気になった。業種をまたいだ広い視野やつながりは「社会の中で子どもを育てる」ことを大切にしている保育の理念からみても欠かせない。意識的に、異なる社会や思想に触れ、視野を広げていくことが重要だ。

〈4つ目：お金との関わり〉ほぼ全ての園で共通する課題の一つ。母の運営する園でも、お金を理由に保育士が離職するケースが多く、子どもたちへの精神的負担も大きい出来事だった。園の理念にこだわりつつも、安定した運営のためにはお金も必要で、無視できない課題である。

▼3-3. 基礎調査から

自然と他業種との関わりは、課題として認識されていない場合が多かった。そのため実践記録も特に少なく、新たなポテンシャルも見つかるのではないかと考えた。

4. 課題を意識した実践と結果

▼4-0. 実践のフィールド「HANAの森」とは。



愛媛県西条市、中心地から車で10分ほどの距離にあり、農地と山林合わせて2.4haの広さがある。敷地内にある民家は8月に民泊としてオープン。

そこで実施したいいくつかの実践をここで紹介する。

▼4-1. 地域との関わりについての課題

活動開始前に地域住民への挨拶を行った。その際、①突然地域に人が出入りし始めて驚かせないように、活動開始前に訪問すること、②不信感を抱かせないように、相手にとって聞き慣れない言葉を用いないこと、③一人暮らしの住民の不信感を軽減できるように、一人では訪問しないことの三点を心がけた。その結果比較的安心して受け入れてもらえた様に思う。顔が見える関係になれたことで、お互いにとって安心できる関係に近づけた点が、この実践における一番の成果だ。一方で、活動内容を視覚的に伝える資料を用意していなかった点や、多くの人にとって馴染みのなかった「森のようちえん」という言葉を多用し、困惑を招いてしまった点は反省点として残った。

▼4-2. 自然との関わりについての課題

整備を始める前に生物調査を兼ねた自然観察会を実施した。①いきなり大人数が来て地域の人に驚かれるという過去の事例から、あえて少人数で開催すること、②過度なインパクトを防ぐために整備開始前に実施すること、③関係者だけでやりがちな調査だが、所属感を持ってもらうきっかけに、あえて参加者を巻き込むことの三点を心がけた。その結果、調査前には全く気付いていなかった多様なトンボ類が確認され、豊かな湿地環境が残されていることが分かった。元々自然との共生を重視した活動をしたと考えていたため、この結果を参考にトンボを環境指標の一つと位置づけた。そして話し合いの末に整備方針として「トンボ公園」を目指していくことが決まった。



▼4-3. 他業種との関わりでの課題

本実践では、分野を限定せず誘われた場には積極的に足を運び、とにかく人に会いに行くことを意識した。その結果、自身で意識していた以上に、これまで似た考えを持つ人々とばかり関わっていたことに気づかされた。同じ教育分野であっても、地元小学校教員の話聞くことは新鮮な経験であり、自身の視野の狭さを実感する機会となった。その過程で、偶然手に取ったタウン誌をきっかけにヤギを譲ってもらえることになり、念願だった動物の受け入れが叶った。除草や体験を期待した動物たちだったが、想定外にも地域住民との関係構築に寄与する存在となった。これは、外部とのつながりを意識して行動していたからこそ、生まれたご縁、成果であったと考える。

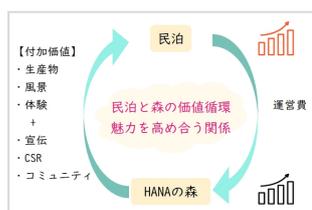


▼4-4. お金との関わりでの課題

民泊と森のようちえんを組み合わせた運営の持続可能性を検討する中で、「異業種連携型森のようちえん」と名づけた事業計画を構想した。現時点では民泊事業が収益を担う一方、HANAの森は手間がかかる上に赤字部門である。しかし設備の老朽化や周辺施設の増加により、宿の魅力の維持は一般的に難しいと言われている。

そこで、HANAの森での生産物の提供や体験活動、森のようちえんの風景そのものを宿の価値として活用し、その対価として宿から運営資金をもらうことで、両事業が相互に支え合う

価値循環を目指した。この仕組みは宿泊事業に限らず、他の業種との連携にも応用可能である。本実践が成功



「異業種連携型」運営モデル

すれば、森のようちえん運営における新たな持続可能な運営モデルとなる可能性を有していると考えられる。

5. 専門家からの評価

1月23日、27日に異なる視点を持つ3人の森のようちえんの専門家から、本研究の評価を頂いた。

◆兼平早苗さん（広島県。生活の森おうちえん代表。移住者として活動を初めて8年目の先輩。）

「4つの課題、たしかにどの森のようちえんも抱えている課題だろうと思う。」

「赤字ではないが、スタッフにももっと還元したいと思っている。そのために園児を増やしたいが、過疎地域なため園児獲得に課題を感じている。」

◆松本信吾さん（岐阜県聖徳学園大学教授。多くの幼児教育の現場を見て来た保育の専門家。）

「今回の課題研究で4つの視点が明示されたことは、森で行う保育の意義や課題を広い視野で捉える機会を与えるという意味で、既存園にとっても、今後新たに始めようとする園にとっても、大変有意義な指摘であると思われる。」

◆関山隆一さん（神奈川県。もあなキッズ自然楽校理事長。設立19年目。異なる経営スタイルで幼児対象の園を6園運営。）

「マーケティングができてない。保育をやりたいがためにこの町で保育園をやりたいだけでは、補助金をもらうために市町村は説得できない。」

「人と人のつながりが絶たれて、愚痴も言えない状況から育児困難な親が増えている。だから、森のようちえんでは保育だけでなく、安心できる地域コミュニティ、人間同士が繋がる拠点になっていけたら良い。」

6. 全体のまとめ

松本氏からのコメントの様に、今回提示した4つの課題は、大きく語られてこなかった視点であり、その視点を基にした実践記録が残せたこと自体が有意義なことだと考える。しかし、本実践は準備および計画段階にとどまっており、実際の事業運営はまだ開始されていない。そのため4つの課題を解決することが「持続可能な運営」に繋がるかどうか、この先10年20年かけて観察を続けて行く必要がある。

7. 今後の展望

4月より、本研究のフィールドとなったHANAの森において事業を開始する予定である。研究発表は一つの区切りであると同時に、今後の実践に向けた出発点でもある。本研究を通して得られた視点やつながりを大切にしながら、持続可能な運営を目指して活動したい。そして、森のようちえんがより多くの子どもたちの選択肢の一つとなるように、私にできることから取り組んでいこうと思う。